

# ブルーストとスノビズム

ヴィルパリジ公爵夫人の回想録についての考察

浅間 哲平

ブルーストとスノビズムの関係について『失われた時を求めて』の読者はしばしば当惑しつつも議論を重ねてきた。この長大な小説の最終巻『見出された時』は、作家の死後5年が経とうとしていた1927年に発行されることになるが、それから程なくして次のような批判を受けている。ブルーストを代表とする「行き過ぎた分析、独創性と難解さに対する先入観、曲芸のような文体は、シックな人々（つまりは悪趣味な暇人たち）を祭り上げる文学的スノビズムの御蔭で流行となった<sup>1</sup>」。社交界に出入りした浅薄なスノップという評判は、作家の生前からあった。似たような評価は、作家の死後も、さらに作品の全貌が明らかになってからも根強く残っていたことになる。現在、ブルーストのスノビズムは「固定観念<sup>2</sup>」として、伝説化している。

確かに、そのような伝説に反対する者がいないわけではなかった。しかし、そのような異議申し立ては、ブルーストの「悪徳」が広く認められているからこそ行われたと考えられる<sup>3</sup>。例えば、ブルーストの天才を傷つけないように、作家はある時点までスノップであったが、その欠点を克服したと考える

---

<sup>1</sup> Gaston Picard, « Faut-il revenir aux Écoles littéraires ? », *Revue mondiale*, 1<sup>er</sup> et 15 décembre 1929, p. 233-263, 343-367. 引用は次の文献に教えられた（書誌情報の誤りは訂正した）。Serge Gaubert, *Proust ou le roman de la différence : L'individu et le monde social*, Lyon, Presses universitaires de Lyon, 1980, p. 389.

<sup>2</sup> ベルナール・ブランは、ル・カヴァリエ・ブルー出版発行のシリーズ « idées reçues » の中で「ブルーストは勤勉なスノップである」というルイ・アラゴンの言葉を引用して、スノップとこの作家の関係について検討している。Bernard Brun, *Marcel Proust*, Paris, Le Cavalier Bleu, coll. « idées reçues », 2007, p. 47-52.

<sup>3</sup> とりわけ、1940年代までは、左翼的言説においてブルーストのスノビズムを厳しく批判する傾向が強かった。ガストン・ピカールのアンケートやアラゴンの挑発は、そのような歴史的文脈に置かれるべきものである。これらのブルースト批判は、現在ほとんど忘れられ、その意義を真剣に考慮されることは極めて稀になっている。しかし、ブルーストが生前に受けていた「スノップ」・「愛好家」といった批判がいかに根強かったかを伝えるという意味では、興味深い資料である。以下の論考がその概要を教えてくれる。Jeanyves Guérin, « La gauche progressiste et l'analyseur Proust », *Travaux et recherches de l'UMLV*, novembre 2004, numéro spécial « Autour de Proust », p. 169-184.

者がいる<sup>4</sup>。あるいは、そのような考えを推し進めることで、『失われた時を求めて』に見出されるのは、スノップを批判するブルーストの視点であると主張する者もいる。「スノップに抗するブルースト」は、この性質を「ある種の疑似餌として描いた。人間の野心、欲望、熱狂はその餌に向かって飛び掛かるのだが、虚無に陥る、それらが働きかける瑣末な対象には支えがないのである<sup>5</sup>」。

本論の目的は、ブルーストの道徳的性質を判断することにはなく、この作家の小説においてスノビズムが果たす役割について理解することにある。しばしば指摘されてきたように、『失われた時を求めて』は、芸術家の「天職(vocation)」の物語として読める。小説の終盤で語り手「私」が社交界を諦め文学に身を捧げると述べているからである。この信仰告白は二通りに理解できる。まずは、スノップが住まう世俗の世界は神聖な芸術家の領域と相容れないから、「私」は芸術家となってスノビズムを捨てるという宣言をしているというように考えられる。ところが、やがて超脱する者が、あるとき世に迷うように、「私」はこの告白以前に様々な道程を経てきているので、語り手は芸術家になる前の過程を報告しているのだとも考えられる。「私」の中に、あるときはサロンに出入りするスノップとしての声が入り、あるときは芸術を信仰し欲望から自由になった声が入るのである。芸術家になるプロセスを問うという狙いのもと、スノビズムという観点から、小説を読み直すことができないだろうか。

なるほど、スノビズムを理解するという漠とした試みには困難が想定される。スノップという語を厳密に定義するには一冊の書物であっても足りないことは、容易に想像される<sup>6</sup>。ここでは、語義の調査からではなく、この問題についての先行研究を整理することで、なにが問われているのか、まずは見当をつけたい。次に、本論は、これまでスノビズムの観点から検討される機

---

<sup>4</sup> 例えば以下の二論考を参照。John J. Spagnoli, *The Social Attitude of Marcel Proust*, New York, Publications of the Institute of French Studies, 1936, ch. III : « Criticism of Society : Snobbery »; Léon Tauman, *Marcel Proust : Une vie et une synthèse*, Paris, Armand Colin, 1949, ch. III : « Mondanité et Snobisme ». 以上の論考は次の文献に教えられた。Richard L. Kopp, *Marcel Proust as a Social Critic*, Rutherford, Madison, Teaneck, Fairleigh Dickinson University Press, 1971, p. 12.

<sup>5</sup> Jean-François Revel, *Sur Proust*, Paris, René Julliard, 1960, ch. : « Contre les snobs ».

<sup>6</sup> その難しさを確認するのであれば次の二冊が簡便である。Philippe du Puy de Clinchamps, *Le Snobisme*, Paris, PUF, coll. « Que-sais-je? », 1966; Philippe Jullian, *Dictionnaire du snobisme*, nouvelle édition avec avant-propos de Ghislain de Diesbach, Paris, Bartillat, 2006. 特に「Mémoires」と「Proustien」の項を参照。

会の乏しかったプルーストの論考「読書の日々」を手がかりとして、考察を進める。「読書の日々」は、1907年3月20日に「フィガロ」紙に発表されたもので<sup>7</sup>、プルーストは「スノビズムと後世」と題する意図があったことが分かっている。作家が「スノビズム」を主題としたテキストを分析することで、これまでプルーストにおけるこの嗜好について考えられてきた論点を改めて整理することを試みる。当該の記事の大部分が『失われた時を求めて』に現れるヴィルパリジ公爵夫人のスノビズムが描かれた挿話の中に取り込まれたことが判明しているため、最後に、この議論が小説でどのように発展されていくか検証したい。プルーストは自らの避けたい習癖と自らが置かれた状況を、どのように作品化していったのであろうか。

プルーストにおけるスノビズムに早い時期に注目したのは、ポール・ヴァレリーである<sup>8</sup>。詩人はこの問題に対して、次のような説明をしている。

プルーストは、特異なほど豊かで興味深いほど練り上げられた内的な生活がはらむ力を、表面的であることを必要とし、また表面的でしかあり得ない瑣末な社交界の表現にあてることができた。

ヴァレリーは詩と小説を対比させた上で、小説の構造に本質的なものとして「内的な生活」と「表面的な社交界」という対立項を見ている。ここで注目しなければならないのは、深い内省が儀礼的な交際に勝っているということではない。むしろ、内と外が同時に並存しているということなのである。

失った全て、あるいは失ったと思えるもの全ては、しかし、おのずと希望することのできる全てであり、それこそがあらゆる価値を含み、しかしまたなんの価値もない宝なのであって、各人はそこから自分がこのようであるという存在を引き出すことになる。マルセル・プルーストが失われた時と呼んだのは、おそらくそのことなのだ。

---

<sup>7</sup> 1905年6月15日「ラ・ルネサンス・ラティーン」に発表された「読書について」とは別の論考。「読書について」は、ラスキン『胡麻と百合』の翻訳（1906）の序文として掲載され、『模作と雑録』（1917）に「読書の日々」という本論が扱う論考と同じ題名で収録された。プルーストの読書論というと、まずはこのラスキンの翻訳への序文が考察の対象となることがしばしばであり、本論が扱う「読書の日々」は蔑ろにされてきた。しかし前者が幼年期の読書を扱うものであるとすれば、後者は青年期の読書を扱うものであり、読書論として対をなすのであって、重要性は同程度と信じる。

<sup>8</sup> Paul Valéry, « Hommage », *La Nouvelle Revue Française*, 1<sup>er</sup> janvier 1923, t. XX, 20<sup>e</sup> Année, n° 112, « Hommage à Marcel Proust », p. 117-122.

失われた無価値なものとの掛け替えのない貴重なものを和解させようとするヴァレリーによれば、人は社交界で人生を浪費しているという印象をもつにも関わらず、その失われた人生は内的なものとして潜在的に存在することになる。意識は常に深みを志向し、社会は「表面的でしかあり得ない」のであり、互いが補い合うものとしてのみ存在し得る。この小説は、内的なもの（深み）にだけではなく外的なもの（表面）によって成り立っていると言うのだ。社交界の機能と内面の意識の役割を結び付けると言うヴァレリーの考え方は、その後のブルーストのスノビズムを対象とした研究の方向性を規定した。

以下に参照される諸研究は、それぞれのやり方で、ヴァレリーが提起した対立を展開させることになる。しかし、その前に、例外的な試みを確認しておこう。ルネ・ジラルドは、ブルーストの描くスノビズムを、対象に向かう欲望としてではなく、「媒体」によって喚起される欲望として論じている。この人類学者は、近代における欲望のあり方をひとつの図式化された社会に収斂させて描こうとした。欲望される対象は、それ自体として重要であるわけではなく、ライヴァル同士の二者の競争から生まれるとするその関係は、欲望の三角形として名高い<sup>9</sup>。欲望という捉えがたい力を定着させようというこの試みとは逆に、カトリーヌ・ビドゥ=サッカリアセンは、ブルーストの小説を、社会科学的言説として考えることを提案している。この社会学者は、その上で、ブルーストの提案する社会像においては、個人におけるスノビズムよりは「全体論的な方向性、さらに言えばデュルケムの提唱する方向性」を前面に押し出し、小説が持つ錯綜した時間ではなく、現実の客観的な年月からブルーストの作品を理解できると極言する。貴族とブルジョワジーという二階級が次第に近づいて行く現実を描く『失われた時を求めて』において、スノップとはその過渡期を生きる人物たちとして想定されている<sup>10</sup>。両研究は、作家固有の経験の産物でありながら構造を持った作品でもあるという小説の持つ曖昧さを捨象することで、前者は人間の欲望を、後者は現実の社会を理解しようとする試論であると言える。

小説家ブルーストを対象とする狭義の文学研究は、より慎重にそのスノビズムを描き出している。ジャック・ナタンは、まずいかにして作家が貴族たちと出会ったか検証し、そして次にどのようにして小説が貴族を賞賛し非難

---

<sup>9</sup> René Girard, *Mensonge romantique et vérité romanesque* (1961), Paris, Grasset, coll. « Les Cahiers Rouges », 2001.

<sup>10</sup> Catherine Bidou-Zachariassen, *Proust sociologue : De la maison aristocratique au salon bourgeois*, Paris, Descartes & Cie, 1997.

したかを考証している。その結果、現実の人生と小説の言説という異なったレベルを導入し、プルーストの矛盾した態度を説明しようとする<sup>11</sup>。エミリアン・カラシュスは、スノップという文化現象の中にプルーストのテキストを位置づけるために、語の誕生からその発展を詳細に追っていく。社交界を舞台としてスノップを描く流行の小説ジャンルから『失われた時を求めて』が受け継いでいる数多くの主題を明らかにし、その上で、『楽しみと日々』・『ジャン・サントウイユ』の時期と『失われた時を求めて』の時期を区別することで、「生きられたスノビズム」から「芸術におけるスノビズム」への変遷を描いている<sup>12</sup>。アンヌ・アンリは、プルーストの同時代を生きた社会学者ジャン＝ガブリエル・タルドの提唱した「模倣」の概念を再評価することから始める。「社会とは、あるスターによって具現化される思考・価値・流行に、各々の個人が賛同することで規定される」。アンリの試論は、プルーストがスノップの特徴を描くにあたりタルドの著作を参照していたことを証明しようとするものであるが、その際に作家の独創性は社会で起こる出来事を客観的な時間列ではなく作品固有のリズムによって提示することにあると手短かに断ることで、既に提示されていた社会観を作家の文体が加工するという見通しを立てている<sup>13</sup>。

『失われた時を求めて』がいかにスノップを描くのか検証する研究は枚挙に遑がない。ここではこの習慣に染まったそれぞれの登場人物について論じる論考は省くことにするが、この問題を考察するにあたって小説の語り手が最も重要な存在であることを確認しておきたい。小説に現れる主要登場人物の目録につけられた序文で、ラモン・フェルナンデスは、登場人物たちがスノビズムによる幻影を帯びているだけではなく、歴史的関心から構築されていると述べることで、プルーストの作品を擁護している。作品を見通す語り手の視線は、虚栄心に曇るかと思えば分析的でもあるというように揺れ動くのである<sup>14</sup>。そのような観点から、ピエール・ジマは、語り手がどのようなときにスノップであり、またいつその幻想から覚めるのかを小説の具体的な場面から考証する。その結果、エルスチールの作品が語り手の海に対するヴ

---

<sup>11</sup> Jacques Nathan, *La Morale de Proust*, Paris, Nizet, 1953.

<sup>12</sup> Émilien Carassus, *Le Snobisme et les lettres françaises de Paul Bourget à Marcel Proust 1884-1914*, Paris, Librairie Armand Colin, 1966.

<sup>13</sup> Anne Henry, *Marcel Proust : Théorie pour une esthétique*, Paris, Klincksieck, 1981.

<sup>14</sup> Ramon Fernandez, « Proust dans la société », in *Les Cahiers Marcel Proust 2 : Répertoire des personnages de « À la recherche du temps perdu » par Charles Daudet*, Paris, Gallimard, 1927, p. VII-XXIII.

イジョンを変化させるように、スノビズムは社交界に対する見方を変化させていると指摘している<sup>15</sup>。

代表的な先行研究に目を通すことで、スノビズムをめぐって働いているいくつかの二項対立が確認された。すなわち、作家の人生と作品が織り成す対立（現実とフィクション、未熟で自伝的な作品と「完成された」小説、参照資料と文体の発明）あるいは語り手が語る世界と感じる内面が構成する対立（浅薄と分析、夢想と覚醒）である。プルーストのスノビズムについて考察するために、作家や語り手がどのように「世界・社交界 (le monde)」を捉えるのか、そして、その認識がどのように変化するのか、以上のようなことがこれまで問題となってきたと大雑把には言えるだろう。

では、上で把握しようと努めた問題の中に論考「読書の日々（スノビズムと後世）」<sup>16</sup>はどのように位置づけられるだろうか。まずは、作家の置かれた歴史的・伝記的状況を簡単に振り返ることで、考えてみたい。このテキストはボワーニュ公爵夫人（1781-1866）が残した『回想録』<sup>17</sup>の書評という体裁をとっていることから、回想録という文学ジャンルの置かれた一般的状況と、このジャンルについてのプルーストの認識をまずは一瞥しておく。その上で、テキストの内容を具体的に探るために記事を前半と後半に分けて詳述し、プルーストが「スノビズム」という言葉をどのような意味で使おうとしたのかを明らかにしたい。

プルーストの生きた19世紀後半から20世紀始めには、歴史記述において既に実証主義が支配的であったために、長い文学的伝統を誇る回想録というジャンルは、筆者の主観が反映されるがゆえに、また、各々の個性というよ

---

<sup>15</sup> Pierre V. Zima, *Le Désir du mythe : Une lecture sociologique de Marcel Proust*, Paris, Nizet, 1973.

<sup>16</sup> 「フィガロ」紙には「読書の日々」と題されて発表されたが、プルースト自身は「スノビズムと後世」を題として考えていたと記事中で述べているので、本論ではこのように呼ぶ。 *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*, édition établie par Pierre Clarac avec la collaboration d'Yves Sandre, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p. 527-533. 以下、(EA, 頁数)の略号で本文中に示す。註においても同様。

<sup>17</sup> プルーストが参照したのは、『回想録』が初めて公表された1907-1908年版。それ以外に二種類の校訂版が存在する。 *Récits d'une tante : Mémoires de la comtesse de Boigne née d'Osmond*, publiés d'après le manuscrit original par M. Charles Nicoulaud, 4 vol., Paris, Plon, 1907-1908; *Mémoire de la comtesse de Boigne née d'Osmond : Récits d'une tante*, édition présentée et annotée par Jean-Claude Berchet, 2 vol, Paris, Mercure de France, coll. « le Temps retrouvé », 1999; *Mémoires*, édition établie, commentée et annotée par Henri Rossi, Paris, Honoré Champion, coll. « Bibliothèque des correspondances, mémoires et journaux », 2007.

りは旧態然とした社会を好んで描くがゆえに、語られていることの現実性に疑いを持たれることになった。このジャンルは、貴族の社交界という斜陽の集団がもたらす恣意的な「逸話 (anecdote)」や「警句 (bons mots)」の集積に過ぎないと考えられるようになっていった<sup>18</sup>。描かれる場が、宮廷からサロンへと移り、権威ある歴史家とスノッブな記者との区別がなくなったことも、回想録の真実味について問題を複雑にした一因として考えられるだろう<sup>19</sup>。そのような時代状況は、エドモン・ド・ゴンクールが『日記』の狙いを説明する序文に典型的な形で現れている。ゴンクールは、日々移り変わる人物の肖像によって「瞬間の真実」を捉えるという自分の狙いと回想録を書くことを対比して次のように記している。

回想録作者たちは、人間たちをひとまとめにしてひとつのかたまりとして描き、出会いを遠ざけ塗り込んでしまうことで色合いを冷ましてしまい、歴史的人物像を提示する。そういった作家たちを真似ようなどとはまったく思わなかった<sup>20</sup>。

兄弟は、回想録というジャンルを軽蔑すると同時に、翻ってサロン文化の後継者として、なによりもサン・シモンの後継者として、そのジャンルの革新を目指したのである<sup>21</sup>。サン・シモンの『回想録』とゴンクール兄弟の『日記』の愛読者であったブルーストは、ボワニユ夫人の『回想録』の中に、このジャンルが抱えていた問題を感じていたと推測される。

ブルーストは、ボワニユ公爵夫人の著作を論じるにあたって、前半では電話でのおしゃべりと読書を比較し、後半では著者であり主人公でもある夫人の社交界での没落について論じている。一見すると他愛もないこれらのエピソードは、回想録というジャンルの置かれた状況から見れば、ブルーストのスノビズムについて先行研究が明らかにしてきた人生と作品という対立や

---

<sup>18</sup> 回想録についての概観は以下を参照した。Jean-Louis Jeannelle, *Écrire ses Mémoires au XX<sup>e</sup> siècle : Déclin et renouveau*, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque des idées », 2008, 1<sup>re</sup> partie : « Le temps du souvenir », ch. I : « Mémoires fin de siècle » et ch. II : « Histoire, mémoire et postérité ».

<sup>19</sup> ルイ・フィリップの即位が、貴族の宮廷離れを呼び、それぞれの社交界を形成した事情は以下に簡潔に述べられている。« Tout-Paris », in Alfred Fierro, *Dictionnaire de Paris*, Paris, Robert Laffont, coll. « Bouquins », 1996.

<sup>20</sup> « Préface de Edmond de Goncourt à l'édition de 1887 », in Edmond et Jules de Goncourt, *Journal : Mémoire de la vie littéraire*, texte intégral établi et annoté par Robert Ricatte, 3 vol., Paris, Robert Laffont, coll. « Bouquins », 1989, t. I, p. 19-20.

<sup>21</sup> この点については上のゴンクールの日記の校訂版に付けられた研究者による序文を参照。Robert Kopp, « Préface : Les frères Goncourt ou les paradoxes de la vérité », in *Ibid.*, p. I-XLVI.

社会と個人という葛藤の中に位置づけられるべきものであることが理解される。社交界で話された「逸話」や「警句」がどのように書かれた作品へと定着され得るのか<sup>22</sup>、存在の基盤を奪われた一人の個人がそれをとりまく激動の社会とどのように折り合っていくのか<sup>23</sup>、そのようなことが問題となっているのだ。

では、プルースト個人の活動の中では、「読書の日々（スノビズムと後世）」は、どのように位置づけられるだろうか。『ジャン・サントゥイユ』の執筆を諦める1899年頃から『失われた時を求めて』に繋がる断片の執筆を開始する1908年頃までの作家の活動は、芸術論、社交記事、そしてそれらが混交したテキストというように分類できる。1900年代から、プルーストは、一方で、芸術についての論考に力を入れるようになった。良く知られているように、ラスキンの翻訳をきっかけとした「ジョン・ラスキン」（1900）、「読書について」（1905）、「自動車旅行の印象」（1907）などが主なものである。他方で、プルーストは、社交界の模様を知らせる記事を複数残している。マティルド皇女のサロン（1903）、マドレーヌ・ルメールのサロン（1903）、エドモン・ド・ポリニャック后妃のサロン（1903）、ドーソンヴィル公爵夫人のサロン（1904）、ポトカ公爵夫人のサロン（1904）などについてプルーストは記している<sup>24</sup>。以上の芸術論と社交記事が持っている性質を併せ持ったものとして、ゲルヌ公爵夫人の歌唱について論じた記事（1905）、ロベール・ド・モンテスキウ伯爵の芸術論の書評（1905）、ノアイユ公爵夫人の詩集の論評（1907）などの貴族の芸術愛好家としての活動を論じたテキストを置くことができるだろう。本論が問題とする「読書の日々（スノビズムと後世）」（1907）は、この第三の категория に当てはめることができる。プル

---

<sup>22</sup> ボワーニュ夫人自身、「本」というよりは「おしゃべり」として、自らの作品を評している。またその「会話術」について回想録の紹介文の中でシャルル・ニクローが賞賛している。Op. cit., 1907-1908, t. I, p. XXXIII et p. XVIII-XIV.

<sup>23</sup> この点については『回想録』につけられた次の序文を参照。Henri Rossi, « introduction », in op. cit., 2007, p. 9-49.

<sup>24</sup> ラスキンに触発された芸術論は『パスティッシュと雑録』（1919）の中に纏められた。五編の社交記事はいずれも「フィガロ」紙にドミニクあるいはホレーショの仮名で「サロン評」として発表されていることから、その纏まりを想定できる。前者は改めて本に収録されたこともあり、プルースト本人にとって重要であったことは疑い得ない。逆に後者は、そのサロン評という性質上、一過性のものとして忘れられがちである。しかし、その数とその後の小説への寄与から考えても、注目されて然るべきではないだろうか。これらの記事を論じた次の希少な論考を参照。Yves Sandre, « Proust chroniqueur », *Revue de l'histoire littéraire de la France*, septembre-décembre 1971, 71<sup>e</sup> année, n° 5-6, « Marcel Proust », p. 771-790.

ーストは、回想録を読むという行為を、芸術活動と社交活動の間にある振る舞いとして理解していたと考えられる。

それでは、回想録というジャンルについての考察や回想録を読むという個人的体験が、どのようにしてプルーストにとってのスノビズムの問題と結びついていくのか。論考の内容について以下で詳細に見ることにする。

記事の冒頭で『回想録』が発刊されたことを通知するとすぐに、プルーストは『回想録』を読むことと電話でのおしゃべりの比較を始める。この記事の前半は、電話が引き起こす「奇跡」について語られることになる。「私たちが話したいと思っている女友達は」「目には見えないけれどそこにいる」(EA, 528)。電話は、離れていて訪れることのできない相手呼び出してくれる新しい技術として、空間的距離を取り去るのだ。向き合う対象が、「そこにいる・いない」というテーマは、この記事で繰り返し現れることになる。

記事の後半部の大半は「フィガロ」紙の都合で割愛されてしまったが、残された原稿からその内容を知ることができる<sup>25</sup>。パワーニュー夫人の語っている「ルイ 16 世の時代には私たちはまだ生まれていなかったのだから、そこを訪れられない」(EA, 530) ことをプルーストは嘆いてみせる。距離は、ここにおいて、時間の次元で考えられることになる。そこを訪れることはできない、しかし、私たちは歴史が隆盛を極める時代を生きている、とプルーストは続ける。だから、「どんなことも忘れられず、なにごとくも破壊されない、人生のどんなに瑣末なことであれ、我々からもっとも遠くに離れているものであれ」(EA, 925)。『回想録』を読むことで、失われたルイ 16 世の時代の社交界が喚起されるのだ。

この論考において前半では私的なおしゃべりを中心に、後半では読書が想像させる社会を中心に論が展開されていることに注意されたい。パワーニュー夫人の『回想録』は、話を聞くこととテキストを読むことの曖昧な関係を教え、個人と社会の関係を説く書物なのである。

しかし、この記事の勘所は、ここまでのどちらかと言えば月並みな論旨を覆す次の点にある。回想録の書き手は社交界の真実を述べているのかとプルーストは問い直すのだ。

---

<sup>25</sup> 草稿から起こされた全文は以下の二箇所で見られる。EA, 924-929; *À la recherche du temps perdu*, édition publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, 4 vol., Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1987-1989, t. II, p. 1610-1614. 『失われた時を求めて』は(巻数、頁数)の略号で、本文中に示す。註においても同様。

これらの回想録は、かつてもそうであったしこれからもそうであるでしょうけれど、ある種の性質を持った人によって書かれるものである。つまり、生まれはたいへい素晴らしく、しかし、理由は分からないが、人気がまったくない人、流行の女性たちが「ラクダ」と呼ぶ人によって (EA, 926)。

社交界での不振を回想録作者の普遍的性質とすることで、ブルーストは、空間的距離、時間的距離に続く第三の距離を設定している。社会的距離である。回想録の主人公は、身分が高く閉じられた社会にかつて生まれついたが、今は社交界の中心から外れている。冴えない招待客を相手に、かつての王族との関係について、いくつかの逸話を披露するのが関の山なのだ。「真の」社交界は、そこに存在したが、今は不在なのである。

読者は、第一に空間的距離を感じ、第二に時間的距離を察知し、最後に社会的距離を理解する。確かに、この距離の性質はそれぞれが異なる。電話に耳を寄せる者と話し相手の間にある距離は、回想録に登場する主人公と社交界の間にある距離と、比較することができるだろうか。前者は現実の世界の出来事を描いたものであるし、後者は回想録の中に感知された出来事ではないのか。そのように問うてみることは可能かもしれない。

しかし、ブルーストのこの論考の目的はボワーニュ夫人の『回想録』の論評であったことを思い返す必要もあるだろう。電話でのおしゃべりと社交界における女性の凋落を描写するのは、読書の経験を説明するために他ならない。読者が、ときに遠くにいる実在した著者の声を近くで聴くような気になり、ときに女主人の流行遅れのサロンで最先端の優美さを感じているような錯覚を覚えるとしたら、それは、読者とテキストの間に生じる想像的距離が原因になっていると考えられる。読者がどの立場でテキストに臨むかによって、その距離は変化するのである。ブルーストが問題とする空間的距離、時間的距離、社会的距離は、読書によって生じる距離なのだ。

「この記事は『スノビズムと後世』と呼ばれるはずでした。でも、このタイトルを、そのままにすることはできないでしょう。スノビズムという語も後世という語も用いることなく、私に割り振られたスペースを使いきってしまいました」(EA, 532)とブルーストは「フィガロ」紙の末尾で述べている。ブルーストは「スノビズム」についてなにを語ろうとしたのだろうか。上で整理した論考の内容から改めて考えてみよう。ブルーストによれば、社交界で「スノビズム」の最先端から相手にされなくなった女は、その回想録によって「後世」の人々に自分のサロンを流行の場として描き出すだけではなく、既にその著作が生まれる前に、「スノップ」に憧れる著者自身の会話によつ

て、不案内な招待客たちに「後世」の人たちに与えるのと同じような効果を与えているという。この説明から考えると、「スノビズム」と「後世」は対の概念であり、時間的パースペクティブにおいては、「後世」が読書のもたらす遅れであるのに対して、「スノビズム」は著者に先んじる権威である。空間的パースペクティブにおいては、「スノビズム」の対象である流行の女達は、遠く離れた存在であり、「後世」の読者と同じように事情を知らない新参者達は、手懐けることのできる近しい存在である<sup>26</sup>。ブルーストは、回想録を読むという経験から、時間的・空間的な構造をもったひとつの社会を想像している。その想像の核をなすのが、「後世」を対とする「スノビズム」なのだ。

ボワージュ夫人の『回想録』の読解を通じて、ブルーストは、まず回想録一般が持つ問題を提示した。それは、話すことと書くことの違いであり、個人と社会の関係であって、回想録作者についての考察とも言える。次に、そのような問題系を回想録の読者として改めて捉え直している。その結果、「スノビズム」と「後世」という論点から、社交界をひとつの構造化された社会として読む見通しを提示した。回想録というジャンルの中で様々に語られてきたスノビズムから、ブルーストは、世界を組み立てる要素としての「スノビズム」を抽出したと言ってよいだろう。

「読書の日々（スノビズムと後世）」で描かれる社交界で没落する女についてのエピソードは、由緒正しいゲルマント家において異色の存在であるヴィルパリジ公爵夫人に割り当てられることで、『失われた時を求めて』の中に取り込まれた。バルベックで祖母によって紹介されたヴィルパリジ夫人がパリで催しているサロンを訪れる折に、語り手は公爵夫人が回想録の執筆を準備していることに言及する（II, 482-487, 489-490, 491-493）<sup>27</sup>。その内容は詳述されることはないけれども、語り手は夫人の死後に出版されるこの著作を読むことになると述べられている（IV, 542）。従って、その中身からとい

---

<sup>26</sup> 「スノビズム (Le Snobisme)」と「後世 (La Postérité)」は概念であると同時にそれを具現化した人物でもある。ボワージュ夫人の『回想録』は、この点でブルーストの作品の先駆としてあるという次の指摘を参照。「個人は社会的意味へと還元されているのであって、それぞれの個人は自分が閉じ込められた社会的関係が織り成す複雑な網の目からのみ自分の生活を引き出している」。Jean-Claude Berchet, « introduction », in *Mémoire de la comtesse de Boigne née d'Osmond : Récits d'une tante*, op. cit., 1999, t. I, p. III-XX.

<sup>27</sup> 電話でのおしゃべりについてのエピソードは、友人サン・ルー公爵のいる駐屯地ドンシエールを訪れた語り手がパリの祖母と話すシーン（II, 431-434）に割り振られる。スノビズムと祖母の関係についての考察は、今後の課題としたい。

うよりは、まずは主要な材料となる出来事から、次にその材料がどのように語られるかという方法の観点から、最後に成立と受容の状況から、ヴィルパリジ夫人の回想録について検討してみたい。この考察によって、「スノビズム」がどのように小説の中で具体化されていくか明らかにすることを旨とする。

ヴィルパリジ夫人の回想録の素材はどのようなものであり、その選択になんらかの兆候は見られるだろうか。サロンでのおしゃべりの内容が、夫人の回想録の中で最も重要な位置を占めることは疑い得ない<sup>28</sup>。というのも、「彼女の会話では、そしてその後出版された彼女の回想録でも同様に、ヴィルパリジ夫人はある種の社交的優美だけを發揮していた」(II, 483) のだから。そのため夫人の会話の内容から回想録で語られることになるエピソードの性質を想像することができる。例えば、父がメリメ家でスタンダールと出会ったという逸話 (II, 70)、シャトブリアンが父の家をしばしば訪れていたという挿話 (II, 81)、叔母に連れて行かれたブローイでシュレーゲルから花について教わった体験談 (II, 571) などから、芸術家との交流について語ることを好む夫人の嗜好が窺える。また、ヌムール公が父の邸宅を訪れたときの気取らなさ、ラ・ロシュフーコー公爵夫人邸を母が訪ねたときの機知を備えた受け答え (II, 84-86)、敵対していたドカーズを自家に招かざるを得なかったときに祖父が示した礼儀正しさと矜持 (II, 489) といった美德について描き出すことを得意としている。家系と芸術における高貴さを、ヴィルパリジ夫人は会話の主な題材としている。

もうひとつの回想録の素材は、夫人の愛人であるノルボワ公爵が中心となって繰り広げる政治にまつわる議論である<sup>29</sup>。「夫人が文学や政治の分野の有名な人たちに強制する総括的考えをともなった大仰な会話は、その『回想』に、コルネイユ風の悲劇や回想録において効果をあげている […] あの政治についての長広舌を備えさせる」(II, 492)<sup>30</sup>。そのような観点から、例えば、

---

<sup>28</sup> ヴィルパリジ夫人を扱った先行研究については以下を参照。これまでの研究は、ブルーストが参照したパワーニュー夫人やサント・ブーヴの著作について検討するだけで、小説における役割について検証していない。Pierre-Louis Rey, « Villeparisis (marquise de) », in *Dictionnaire Marcel Proust*, publié sous la direction d'Annick Bouillaguet et Brian G. Rogers, Paris, Honoré Champion, coll. « Dictionnaires & Références », 2004, p. 1044-1046.

<sup>29</sup> ノルボワ公爵についても、ブルーストが参照したいくつかの資料が指摘されている(以下の論考を参照)。しかし、ここで重要なのは、パワーニュー夫人の『回想録』の書評原稿の時点から、既に回想録作者と政治家がカップルとして想定されていることの意味ではないだろうか。Anne Chevalier, « Norpois (marquis de) », *Ibid.*, p. 696-698.

<sup>30</sup> コルネイユの『ル・シッド』とブレース・ド・モンリュックの回想録の関係について

話者の父が人文社会科学アカデミーの会員に立候補することを阻止するための弁舌 (II, 522-523) やドレフュス事件についての見解 (II, 537-540) といった「政治についての長広舌」は、ヴィルパリジ夫人のサロンでなされ、やがて回想録を彩ることを予感させる。また、ファッフエンハイム大公を人文社会科学アカデミーに推薦するための言論 (II, 559) は、サロンでなされるものではないけれども、同じ性質のものと考えてよいだろう。「交換という手段によって、ある種の欲望を満たしてくれる可能性があるか、それともないか」 (II, 556) という原則に従って物事を判断するノルボワは、ドレフュス事件が引き起こした自分とは関わりのない裁判に対しては、ドレフュス主義・反ドレフュス主義どちらかに肩入れするのではなく「法廷の公平無私」 (II, 539) を犯すべきではないと主張する。自分が一員として参加するアカデミーの選挙では、利益をもたらす力があるかないかという判断に従って、語り手の父への協力は固辞し、ドイツの大公への協力を約束する。政治における権威という題材をノルボワは夫人の回想録に提供している。

ヴィルパリジとノルボワの言論は、話術の伝統において、私的なものと公的なもの、おしゃべりと雄弁というように分類できるかもしれない。一方で、奢侈・奔放さ・遊戯性が、他方で、利便性・便宜性・効用が重視されるという意味において、前者は高貴でありながら単純なものであり、後者は俗なものであるにもかかわらず技巧に富んだ修練によるものである<sup>31</sup>。ヴィルパリジは「当意即妙 (à-propos)」 (II, 70) を重んじ、ノルボワは説得することを目的とする。それにもかかわらず、このカップルが切り離して考えることができないのは、ノルボワの雄弁は「紋切り型」 (I, 474) に陥り、ヴィルパリジのおしゃべりは残された記録を繰り返しているに過ぎないからである。「歴史的人物たちが彼女に宛てた直筆の手紙は、回想録の中に証明書として複写されることになっていた」 (II, 490)。一方で、「私」がノルボワの言葉を古びた言葉の「完全なリスト」 (I, 429) であると認め、書き留めておかなかったことを後悔し、他方で、ルグランダンがヴィルパリジの言ったことを全てノートしておけばとおべっかを使っている (II, 499) ように、並べ替える

---

て、次の論考に興味深い指摘がある。Marc Fumaroli, « Les Mémoires au carrefour des genres en prose », in *La Diplomatie de l'esprit : De Montaigne à La Fontaine*, nouvelle édition augmentée, Paris, Hermann, coll. « savoir : lettres », 1998, p. 183-215.

<sup>31</sup> フランスの会話文化の歴史については次の論考を参照。Marc Fumaroli, « Conversation », in *Les Lieux de mémoire*, sous la direction de Pierre Nora, 3 vol., Paris, Gallimard, coll. « Quarto », 1997, t. III, p. 3617-3675.

だけで利用できる限定された語彙が、両者に共通する表現手段であると言える。

ヴィルパリジ夫人の回想録の成立と受容に深く関与していると話者によって指摘されているのは、材木商の娘に過ぎないブランシュ・ルロワ夫人である<sup>32</sup>。社交界で幅を利かせているこの夫人は、ゲルマント公爵夫人を夜会に招くだけの社交的地位を持ち、得体の知れない人物が出入りするヴィルパリジ夫人のサロンには決して近寄らないスノブとされる。ヴィルパリジ夫人はルロワ夫人の無関心を恨めしく思い、装った軽蔑の裏に強い憧れを隠している (II, 570)。

良く書かれた本があってほしいと願う神こそが、ルロワ夫人のような人たちにあの軽蔑を吹き込むのだ、もし彼女たちがヴィルパリジ夫人のような女たちを夕食に呼ぼうものならば、ヴィルパリジ夫人のような人たちはすぐに書き物机を置き去りにし、8時にでも馬車の準備をさせることを神は良く御存じなのだ (II, 493)。

ヴィルパリジ夫人が、語り手やブロックをサロンに招いて、王侯との交友をひけらかし、芸術家との思い出を語るのは、ルロワ夫人への欲望の裏返しである。その結果、ルロワ夫人の栄光は『見出された時』で語り手が経験する新しい社交界では見る影もなく、ある新参者は夫人がベルゴットの古い女友達であると勘違いしている。それどころか「この若い女はルロワ夫人の名前を偶然耳にした最後の女たちの一人なのである」。ヴィルパリジ夫人の回想録は、ルロワ夫人のことを語らないばかりか、その名前をインデックスにすら載せないことで、後世の読者に社交界での自分の地位を高く見せることに成功した (IV, 541-542)。

ノルボワが王政には関心を持たず世俗の権力に執心するのに似て、ヴィルパリジ夫人は、ルイ・フィリップの後マリー＝アメリーに、娘のように寵愛を受けた自分の経験と、ルロワ夫人の「継続的に招待される力」 (II, 486) を交換したいと考える。絶対的権力を中心とした宮廷ではなく、作家をはじめとする「偉大な人物たち」 (II, 86) が出入りするサロンでは、女主人は自分の正当性を政治家のように主張せねばならない。回想録は生き生きとした会話を蘇らせる場というよりは、社交界における自分の存在価値を証明する手段となっているのだ。ヴィルパリジ夫人の回想録が示唆するスノビズムとは、

<sup>32</sup> この人物については以下を参照した。Pierre-Edmond Robert, « Madame Leroi contre *À la recherche du temps perdu* », *The French Review*, vol. LV, n° 3, février 1982, p. 367-371.

芸術や家系によって力を求めることであり、それはサロンにおいて具現化されるものである。

本論は、回想録からプルーストが割り出したスノビズムをめぐる社会的関係が、ヴィルパリジ夫人のサロンにおいてどのように具現化されているのか考察してきた。もちろん、上で述べた芸術と家系という手段が、全てのサロンにおいて同じように利用されていると即断することはできないだろう。しかし、語り手にとっての社交界デビューの場として設定されているヴィルパリジ夫人のサロンは、ひとつの指標として提示されているように思える。それぞれのサロンで交わされる芸術や家系についての言論に、語り手がどのように反応するか検討することで<sup>33</sup>、小説全体を貫く運動が見えてくるのではないだろうか。

---

<sup>33</sup> 例えば、語り手は、ヴィルパリジ夫人の芸術観について一貫して否定的であり（II, 86）、その家系について評価を変遷させる（II, 113, II, 589-590, III, 797-798）。